



不幸男と不幸女と 幸福女と幸福男

kaji0213

不幸男と不幸女と幸福女と幸福男

不幸男と不幸女と幸福女と幸福男

よく言われるのが、幸福と不幸は糸の撚りのように表裏一体なんだということだ。それなので、幸福が訪れれば、必ず不幸が訪れ、不幸が訪れれば、幸福が訪れる。でも本当はそうじゃないんだ。ボクに不幸が訪れれば、またボクには不幸が訪れる。生まれてきてからずっとそうだった。ボクは思うんだ。世界の幸福の量は決まっているんじゃないかって……。ボクが不幸であればあるほど、世界にボクの不幸の分、幸せになる人が増えるんじゃないかって。そう考えていないとボクは今まで生きて来られなかったんだ……。

この話はひたすら不幸な男と近くの間人を不幸にし続ける女の出会いの物語である。



「ヘルメットよし！ 防弾チョッキよし！ お守りよし！ 受け身よし！」

ボクは朝、学校に行く儀式を始めた。ボクはよく事故にあう。車に追突されるのは日常茶飯事だ。僕は、登校するのにヘルメットを被り、防弾チョッキを着る。お守りも交通安全から魔除け、安産などありとあらゆるお守りを持つ。それと、柔道部に通って身につけた受け身を入念にチェックした。ボクの持論として、車に跳ね飛ばされても受け身さえしっかりすれば何とかなると思っている。ただ、この前の自転車→バイク→乗用車→トラックのコンボではねられたときはさすがにやばかった。あまりの奇跡と一緒に登校していた妹の恵梨は、動画を撮ってネットに投稿したら、デイリーランキング一位になってしまったほどだ。

「お兄……生きて帰ってきてね」

「大丈夫だよ。ボクにはヘルメットがある。簡単には死なないよ」

心配そうに見つめる妹の恵梨の頭をやさしく撫でて、ボクは玄関のドアを開いた。外からは眩しいほどの朝日が入り込んできた。ボクはその朝日の中に飛び込んだ。今日も必ずこの家に帰ってきて見せると信じて……。

「さあてと。ワタシも準備するかな～」

兄を見送った妹は先程の兄を送った様子とはうって変わって、あっけらかんとしている。兄がいつも事故に合うのは目に見えているが、どうせ死なないから別にいいだろうと思っているのだ。さすがに毎日繰り返されると心配する気持ちも薄れてくるものだ。



「右よし、左よし、上空よし」

僕は周りをよく確認して家の敷地から道路へと飛び込んだ。今までの経験上家から出る時が一番危ない。覚えているだけで五十七回は何らかの物体に跳ね飛ばされた。

それならば、バスに乗ればいいと素人の君は思うだろう。ボクにもそう思っていた時期がありました。ただ、ボクの乗ったバスはかなりの確率で事故を起こす。あまりの高確率なので、さすがに他の乗客の人に悪いと思い、それから、ボクは公共機関は使ったことがない。新幹線にも乗れないし、飛行機なんて考えただけでぞっとする。

「たぶん、ボクだけだろうな。これだけ交通安全に気をつけながら歩いているのって」

思わず、独り言をもらしてしまう。ボクは戦場に突入した兵隊のように三百六十度気を配りながら学校に向かった。



「ふう。なんとか何事も無く着いたぞ」

僕は久しぶりにノーマスで学校に着くことができた。ボクだってやればできるんだ。いつもいつも車にはねられる訳でもないし、犬の糞を踏むわけではない。

「危ない！ 避ける！」

「しまった。手が滑った」

「ファー！！」

安心している所に朝練をしている野球部のファールボールと同じく朝練をしている砲丸投げの砲丸とゴルフ部のゴルフボールが同じタイミングでボクに向かって飛んできた。

「なぜに！？」

ボク 능력では二つは避けられるが、一つはさすがに避けられそうに無い。どれを受け止めるのが、一番ダメージが少ないだろうか。野球ボールは硬球なのでとても堅い。さすがのボクのヘルメットでもダメージが大きすぎる。砲丸なんて論外だ。こんなものを食らってしまったら良くて病院送り、悪くてあの世行きだ。それなので消去法でボクはゴルフボールを甘んじて受け入れることにした。

コン！？

ボクのヘルメットとゴルフボールが奇跡的な出会いを果たして、美しい音色を奏でた。ダメージが少ないかと思ったのだが、意外と勢いが強かったようでボクは意識を失いそうになったが何とか耐えた。

「おい！ 大丈夫か！」

「すみません。僕、手あせがひどいもので」

「あなたねえ。ワタシのファー！ が聞こえなかったの（怒）」

ボクのところに野球部の部員と砲丸投げの選手とキャディーさんがやってきた。ボクは慣れているので紳士的に慰謝料を要求し、みんなの連絡先を控えて、学校へと何とか辿り着いた。

「よし、何とか辿り着いたぞおおおおお！」

ボクは生徒玄関でシャウトした。うれしいから仕方が無いのだ。これだけ五体満足で学校まで

辿りつくのは殆どない。学校に行くより、病院に運び込まれる方が多いくらいだ。それなので、ボクは感動のあまり涙を流し、鼻水をだらだらと垂れ流して咆哮した。



お昼も油断できない、どこから不幸がやってくるのか分からないからだ。教室で食べていても、どこからホームランボールが飛んでくるのか分からない。野球部の連中は狙い澄ましたように、ボク目がけて強烈な打球を放つ。学校側も対策を練り、ボクのために防弾ガラスを用意した。だが、それに追い打ちをかけるようにパラグアイから野球留学生がやってきた。彼はとんでもない打球を放ち、ボクの教室の防弾ガラスを破壊した。学校側も諦めて、なぜかボクに教室でお昼を食べることを禁止した。

仕方が無いので、食堂に行って食べることにすると、わざとしか思えないタイミングで食事のボクにタックルを仕掛けてくる。弁当を持っていけば、弁当の中身を唯一の友人坂本君にぶち撒けるし、ラーメンを頼めば、これまた、坂本君にぶちまけてしまう。一月後にはボクと坂本君に食堂立ち入り禁止の張り紙が貼られてしまった。そこで、ボクは友人を失ってしまった。『君のことは嫌いでは無いけれど、ボクは毎日のようにラーメンを被る生活には耐えられない』だそう。全くその通りである。



ボクは五時間目の終わりの休憩時間にたまたま廊下で、シャドウボクシング中のボクシング部にフックを貰い受けてしまい、保健室に運ばれた。保健室の先生もまたあなたねと溜息を吐き、今やボク専用となったベッドに寝かしつけてくれた。

そこでボクは運命の出会いを果たす、小林里奈（こばやしりな）人をひたすら不幸にし続ける女の子。彼女はボクの隣のベッドに腰掛け、意識を失っていたボクを見下ろしていた。

彼女は前髪が長すぎて殆ど顔が見えない。あれだけ目が見えなくて、どこで見ているのだろうか。前髪から時折見える目付きは非常に鋭い。まるでボクを目線で突き刺してしまうようだ。

ボクと彼女は学年が同じ一年だが、クラスは違うので面識はない。ただ彼女はとても有名だ。近づく人間を次々と不幸に陥れて、疫病神と呼ばれ天涯孤独の女の子がいるという噂は聞いたことがあった。

彼女と友達になると、成績は落ちる。恋は実らない。待ち人来たらず。風邪をひく。お小遣いは下がられる。お父さんはリストラされる。お母さんは浮気をする。隣の家の犬は吠える。架空請求される。おばあちゃんがオレオレ詐欺に引っかかる。ボイラーが爆発する。限定百個のパンが目前で売り切れる。楽しみに取っておいたプリンが弟に食べられる。ゲームのセーブデータが次の日には消えてしまう。お気に入りのバンドのドラムが覚せい剤所持で捕まる。あげた宝くじが当たってしまう。冒険して買った新発売のジュースが糞まじりだった。電車で空いた席に座ろうとしたら、先におばさんに座られてしまう。お店で精算をしようとしたら一円だけお金が足り

なかった。機械トレーニングをしたら、肉離れした。八回まで無失点に抑えていたのに、抑え投手が打たれてサヨナラ負けする。家を建てたら手抜き工事だった。渾身のギャグで滑ってしまう。消費税が10%にあがる。自動販売機でジュースを買おうとしたらつり銭切れで買えなかった。などなど数々の不幸が訪れるそうだ。

前に友人だった坂本にあれが噂の小林里奈だということを教えてもらったことがあった。一人だけ教室にぼつんと座り、じっとしている。でもなぜかボクは惹かれるものがあった。ボクの不幸と不幸を与え続ける女の子、それが重なり合えばどうなるのだろうか。マイナスとマイナスが重なるとプラスになるのか。またはマイナスがひたすらマイナスになるだけなのか。ボクは考えるだけで恐ろしかったのでアプローチはかけなかったが、その彼女が今、ボクの近くに居た。

「君が藤堂俊作？」

今まで重なるはずの無いボクと彼女が今、重なり合おうとしていた。

第二話「加速する不幸」

第二話「加速する不幸」

「君が藤堂俊作？」

「そうだけど」

俊作が運び込まれたベッドの上で周りの人間を不幸に陥れる小林里奈に出会った。里奈は長すぎる前髪を右手でかき上げてベッドに寝ている俊作をじっと見つめている。

「私、君に会いたかった。もう君しか居ないの。あなたなら多少不幸になっても大丈夫だと思うの？ ねえ。私たち助けあいましょう」

藤堂俊作が呆気にとられている間に、小林里奈は勝手に話を進めている。

「ちょ、ちょっと待てよ。勝手に話を進めるなよだいたいなんで俺なんだよ」

「君しかいないのよ。私知ってるのよ。私達の町が十七年連続、全国で一番交通事故が多いのが君のせいだってこと、私調べたんだから、去年一年間で君がこの町の全交通事故の七割を占めているってことをね」

「そんな……ことは……ないだろ」

嫌な汗をかいた。

（うすうすは思っていたがやはりそうか。どうりで結構な確率で警察官に出会うわけだ。恐らく、この警察署の交通課の人はよっぽど肩身の狭い想いをしているだろう）

「もしかしたら、私たち二人が助け合うことで、幸せになれるかもしれない。ほら、マイナス掛けるマイナスはプラスになるじゃない」

（この子は俺と同じことを考えているようだ）

「でももしかしたらもっと不幸になるかもよ」

「……まあそう……かもね」

「お願い！ 私を助けると思って」

小林里奈は藤堂俊作の手をぎゅっと握ってじっと目を見つめた。

（よく見ると、可愛い。しかも胸がとても大きいです。胸が手に当たっている。それはとても柔らかい。僕は負けないぞ。負けない。負けない。負けない。負けない）

「分かった。協力しよう」

藤堂俊作は負けてしまった。小林里奈の豊満な胸にだ。誰かが言っていたおっぱいは正義だと、誰だって勝てはしない。藤堂俊作も同様だった。

☆ 称号「おっぱいは正義」を獲得

「ありがとう。藤堂君」

小林里奈は藤堂俊作に思わず抱きついた。こういうことに慣れていない藤堂俊作はとても、どぎまぎして思わず赤面してしまった。当たってはいけないものが直に当たってしまっているのも藤

堂俊作が赤面している原因の一つだ。

（どうやら小林さんは喜ぶと抱きつく癖があるようだ。僕はいいことを覚えてしまった。これからはどんどん小林さんを喜ばすことにしよう。僕もうれしい気持ちになるし、小林さんもうれしい気持ちになるんだし、一石二鳥ではないか）

「よろしくね。藤堂君。これからは何があっても一蓮托生だよ。絶対に裏切らないでね」

「任せろ！」

藤堂俊作と小林里奈はがっちりと握手を交わした。その瞬間藤堂俊作の中でカチリと世界が変わる音が聞こえたような気がした。

「きゃあああ！」

「なんだ！」

保健室の外から女生徒の叫び声が聞こえたかと思ったら、ライオンが保健室のドアを突き破って保健室の中に入ってきた。

「ええええええ！」

「なによ。これ」

「とにかく、逃げよう」

いつも危機に直面することが多い藤堂俊作は、すぐに逃げるという選択肢を選んだ。昔、犬に追いかけられたことがある俊作にとっては、この辺りの切り替えは普通の人間よりも素早かった。里奈の手を引いて、ライオンの脇を抜けて廊下に出た。すぐその後にライオンは逃げ出した俊作達を追いかけてきた。

「なんで追いかけて来るんだよ！」

ものすごい速さで追いかけてくるライオンに、俊作はたまたま持っていた。骨付き肉を放り投げる。だが、ライオンは骨付き肉にはまったく興味が無いようで、むしろ踏みつけて俊作を追いかけてくる。

「なぜに！」

（このままじゃ。二人とも食われちまう。仕方がない）

「小林さん。悪いが二手に別れよう。たぶんあのライオンは僕を追ってくるはずだからその間に助けを呼んできてくれ」

「そうね。分かった。気をつけてね」

ちょうど廊下が右と左に分かれていたので、俊作と里奈は右と左に別れた。

「きゃあああああ。なんでー」

「え？」

ライオンはなぜか、里奈の方を追いかけていった。不幸の量はむしろ里奈の方が多かったようだ。それとも里奈の方がおいしそうに見えたのだろうか。

「すまん。小林さん。あんたのことは忘れないよ」

里奈の向かった方向に向けて、一礼する。

「ゴーフ、ゴーフ」

と思ったら、前からヒョウが現れた。

「うぎゃああああ！」

俊作の不幸は里奈との出会いによって、更に不幸が加速していこうとしていた。

第三話「生きているのが不思議なくらいだ」

第三話「生きているのが不思議なくらいだ」

「ゴーフ、ゴーフ」

俊作は里奈のおかげでライオンの脅威から逃れることができたが、前方から更にヒョウが現れたので、どのように回避するか迷っていた。周りを見回すと、近くに窓があるのが見えた。一階なので俊作は思い切って窓から脱出することにした。

「おら！ あばよ。ヒョウ」

俊作は窓枠に足をかけて飛び降りた。

「きゃあああ！」

「ぐお！」

うまく着地ができると思ったら、何かとぶつかった。柔らかくてとてもいい匂いがする。手をまさぐると柔らかい感触が広がった。

「藤堂君……手を放してくれない」

見ると、俊作は里奈の胸を両手で握りしめていた。

「うお！ すまん。つい……わざとではないんだ」

俊作は名残惜しい手の感触を手放して、慌てて離れた。

☆ 特殊スキル「ラッキースケベ」を獲得

「ガオオオ」

「ゴーフ、ゴーフ」

弁解している時間も無く、もうすぐ側まで、ライオンとヒョウが迫ってきていた。万事休す。さすがの俊作もライオンとヒョウ二匹では勝てる気がしなかった。俊作はこんなことなら里奈の胸をもっと揉んでおくんだと後悔していた。

ドン。ドン。

「危なかったね。目を離した際に檻から逃げてしまってね」

銃声が響き渡ったかと思うと、二人組の迷彩服を来た銃を持った髭面の男が俊作達の所までやってきた。話を聞くと、動物園への移動中にトラブルで檻の鍵が空いてしまってここまで迷い込んでしまったとのことだ。

髭面の男は平謝りをしていましたが、おそらく俊作の不幸体質のせいもあるので素直に怒れなかった。ただ、薄々感づいてはいたが嫌な予感がする。もしかして前より不幸になっていないだろうか。ライオンくらいはエンカウントすることはあってもヒョウまでエンカウントすることはなかった。

「私、こんなこと初めて……。藤堂君って本物だったんだ」

里奈は腰が抜けたようで、立ち上がれないでいた。人を不幸に陥れることはあっても自分が不幸になることはなかったのだろう。俊作にとっては日常茶飯事であったが、里奈にとっては考えられない出来事なのだ。

落ち着いた所で、俊作は里奈の手を取って起き上がらせ、学校へと戻った。

それからは悲惨だった。上からバケツが落ちてきて、水は被るし、いつもは何とも無い椅子が突然壊れて尻を打つし、アンパンを買ったら、なぜか中身のアんが無いし、コーラを買ったらなぜかホットだった。絶対に里奈と協力体制をしたことによって不幸が加速している。俊作は頭が痛い想いだった。果たして今日無事に家まで帰れるのだろうか。



放課後、何かが起こらないうちに一目散に家に帰ろうとすると、里奈がなぜか俊作の教室までやってきていた。

「藤堂君。一緒に帰ろう」

学校の有名人の里奈が教室までやってきたことで、教室中がざわついた。しかも、尋ねる相手が不幸男として有名な藤堂俊作だ。家から出たら、カラスが家の前に百五十羽いるのを目撃した時のような衝撃が教室全体に走った。

「なんで小林里奈と藤堂君が……ひそひそ」

「もしかしたら、隕石でも降ってくるかも」

「いや、人類終了だよ。俺もうちょっと生きてかったのに」

「みんな落ち着け！ 神に祈るんだ。絶対に神様は助けてくれるって。希望を捨てるな！」

「神なんて信じられるか。俺たちはもう終わりだー！」

口々に絶望を叫んでいる。それほど、里奈とセットでいることがひどいことなのかと想い、俊作は絶望していた。

「行きましょ」

俊作は里奈に袖を引っ張られて、教室の外まで連れだされた。そのまま小走りで玄関まで行った。里奈は終始俯いていた。

玄関で立ち止まると、里奈は俊作の袖を離した。俊作は少し名残惜しい気がしたが、いつまでもそうしている訳にはいけないので、とりあえず感触だけ味わっていた。

「私。ちょっと安心してるの」

「なんで？」

「私ずっと一人だったから、あんな目にあっても藤堂君がいるって思うだけで、なぜか安心するの。変だよな」

「小林さん……言うておくがここから一步出たら、生きて帰れないのかも知れないぞ。恐らく僕と小林さんは理由が分からないけども不幸を分け合ったかも知れない。僕は今まで不幸だったけども、これほどのことは無かった。これからもっとひどい目に合う。そんな気がする」

「私、藤堂君と一緒になら大丈夫だよ」

「小林さん……」

ちょっと感動したが、それも俺たちが生きて帰ることができればだ。これから先、何が待ち受けているかわからない。俊作はヘルメットをきっちりと被り直した。

「いくぞ。小林さん……全力で駆け抜けるんだ」

「うん」

「レディー……ゴー！」

俊作達は駆けた。全力で駆けている姿は恐らく異様に見えるのだろう周りは何事かと思ってこちらに視線をよこした。

「来たぞ。右舷前方。野球ボールが二発。左舷前方、槍だ。僕が合図したら転がるんだ」

「うん」

「今だ！」

俊作達はボールと槍を避けるためにゴロゴロと転がった。俊作の装備は万全だったが、里奈は素人なので隙だらけだった。俊作は思わず、見てしまった。小林さん今日は白だ。何がって言わせるなよ。分かっているだろ。

「よし、回避だ」

「やった」

☆称号「男なら見逃せない」を獲得。

何とか校門から脱出した。だが、そこにいかにも柄の悪そうな不良とエンカウトしてしまった。

「おい。兄ちゃん。俺、財布落としたんだよ。貸してくれないか。グヘヘ」

ガムをくちやくちやくと噛みながら、バカそうな金髪に染めた不良は俊作達に絡んできた。俊作は今までは逃走していたが、今は里奈という守るべきものがある。俊作は今までに百五十三回ほどカツアゲされていた。これ以上カツアゲされないために強くなろうと決心し、俊作は見よう見まねで少林寺拳法を身につけた。決して、人様に向けて使わないと決心していたが、今はそれどころでない。守るべきもののためには己の信念など捨ててしまわなくてはならない。

「なあ。兄ちゃんよおー。五百円でもいいんだよ。貸してくれよー。グベボボボ」

「は！」

俊作は隙だらけの不良の金髪の後頭部に回し蹴りを食らわした。不良はきりもみしながら回転し、地面にドッキングした。

「お前。何しとんじゃー」

「うぬらああ！」

「ほげええええ！」

どこから出てきたのか、不良がどんどん沸いてきた。俊作は一人一人、的確に攻撃し倒していった。ただ、倒しても、倒しても不良が沸いて来た。百人ほど倒したところで俊作は飽きてきた

。結局、俊作は戦術的撤退をすることにした。里奈の手を引いて逃げた。しばらく逃げたところで里奈が急に止まった。

「私、ここで」

「じゃあな。生きていたら会おう」

「私、朝迎えに行くから」

「じゃあな」

「うん。また明日ね」

手を振って里奈と別れた。ただ気になることを里奈は言っていた。

(ん？ 迎えに行く？ どういうことだ。まあいいか。とにかく先は長い。気を抜かないようにして、何とか家まで向かおう)

☆称号「百人斬り」を獲得

「はあ。はあ。なんとか辿りついたぞ」

俊作は犬の糞を踏むこと二回、自転車に轢かれそうになること三回を何とか回避して命からがら自分の家まで帰ることができた。俊作は戦地から戻ってきた兵隊は恐らくこのような思いをしたんだろうなと実感していた。重い体を何とか奮い立たせて玄関のドアを開けて、玄関に倒れこんだ。

「お兄！ やっと帰ってきた。今まで何してたの」

帰ったら、帰ったらで妹の恵梨がなぜか不機嫌だった。

「な……なんだ。悪いけど。水をくれないか。兄さん波乱万丈すぎて喉が渴いたんだ」

「無いよ……」

「なんだって？」

「お兄にあげる水は無いって言ったの。それよりもお兄、恵梨のパンツ盗んだでしょ」

「はああああああああ！！ 何言ってるんだよ」

何が悲しくて妹のパンツなど盗まにゃいかんのだ。冗談にも程があるし、俊作という人物の品性を疑われる発言だった。

「お前が何がどうなったらそうなるんだよ。完結に五文字で言ってくれ」

「問答無用！ たああああああ！！」

ビターン

俊作は簡潔に五文字で説明されて、右頬にビンタを思い切り食らって玄関のドアを突き破り庭まで出た。

「お兄のド変態。恵梨、友達の家泊まるから」

「おい。待て。ぐほ……どこ……行く……んだ」

恵梨は俊作をわざと踏みつけて荷物を持って出ていった。訳が分からなかった。

(なんで恵梨のパンツが無くなると、僕のせいになるんだ)

「いったい。どうなってるんだー！！」

俊作の叫びが辺りにこだました。近所の人からうるさいと怒鳴られたのは言うまでもない。

☆称号「妹のパンツを盗む容疑」を獲得した。



深夜。さびしく一人、カップラーメンで夕食を済ませて、俊作は早々に就寝することにした。起きていても碌なことが起きないからだ。

「まさか、火事になるとか泥棒に入られるとかはしないだろうな」

俊作は用心して居間で寝ることにした。枕元にはバットと懐中電灯、通販で買った煙幕、消化器を置いた。

「羊が池袋駅に一匹、羊が大塚駅に一匹、羊が巣鴨駅に一匹、羊が駒込駅に一匹」

俊作は中々寝付けずに羊を永遠と数えていた。山手線を五周ほどしたところでようやく眠気がやってきた。

何か変な感じがして、目を開けた。しかし、体が動かない。声も出ない。もしかしてこれは金縛りというやつなのか。何とか試行錯誤して声だけは出るようになった。

「う……動かねえ」

そこに、いつも大人しいとなりの犬が狂ったように吠えている。俊作は金縛りにもかかるし、犬は吠えるわで眠れないでいた。

「ど……どうしたの？ ケルベロスちゃん。お腹が痛いのか？」

「とんでもねえ。名前つけんなよ。ばばあ。……え」

俊作が見ると、目の前に鎌を持った死神がいた。その死神がニヤリと笑った。

「ヒ」

俊作は小さく悲鳴をあげて気絶した。



翌朝、ものすごい勢いで目が覚めた。体中は汗だらけだった。首に何か切られたような傷があったが気にしないことにした。

「僕、生きてる。生きてるよおおおおお！」

俊作は生きていることを噛み締めて、起き上がろうとしたが、中々体が起きられない。心身ともにぼろぼろなのか。体が尋常でないほど重い。体はきついし、ちょっと昨日の不幸はひどすぎる。しばらく外出は控えた方がいいかもしれない。落ち着いたら、行きつけの神社でお祓いを

してもらおう。とりあえず学校は今日は休もう。

ピンポン

家の呼び鈴が鳴った。家には俊作しか居ないので永遠と呼び鈴が鳴り続いた。仕方がなく玄関のドアを開けると、小林立奈がいた。今日も巨乳だった。一度気になると気になってしょうがない。失礼だとは思いますが、視線は胸にいつてしまう。

「藤島君……迎えに来たよ。頑張って一緒に生き抜こう」

「悪い。何か今日は嫌な予感がするから休むよ。じゃあな」

俊作は即答してドアを閉めようとしたが、里奈が素早くドアに右足を挟み込んでドアをしまらないようにした。

(あんたはどこかの刑事かなんかか)

「だめ。助けあおうって言ったじゃないの」

無理やり引っ張られ、家の外まで出てしまった。

「小林さん。本当に悪いけど、僕まだ生きていたいんだよ。今日家の外に出た
らぜ——————たいに大変なことになる」

「藤堂君は冗談がうまいな。はははは。あー、おかしい」

昨日あんなことがあったのに、小林さんは笑っていた。俊作にとってはまるで笑えなかった。

「大丈夫。何とかなるよ」

その脳天気さが俊作は羨ましかった。俊作は今まで生きてこられたのが奇跡としか言えない生活を送っていたので、何とかなるではなくて、何とかしてきたのだ。

だが、里奈に押し切られて結局学校に行くことになった。

「父さん。母さん。もしかしたら僕、そっちに行くかもしれないからよろしくね」

俊作は亡くなった父さんと母さんに挨拶をして、装備を嚴重に装着して、玄関のドアの前で十字を切った。

「ぐ……」

俊作は中々ドアを開けられないでいた。

(今日は本当にまずい気がする。僕の何かがそう告げている。ただ、僕の横で柄にも無く、ニコニコしている小林さんを裏切るわけには行かない)

意を決し、玄関を開けようとする、いきなりドアが開いた。勢い余って俊作は頭から玄関前のコンクリートの地面に頭からダイブしてしまった。

「お兄大変だよ！」

「ぐああああ！ 痛てええええええ！」

「藤島君！ しっかりして」

俊作はあまりの痛みに玄関の前で転げ回った。意識は朦朧として見えなくていいものまで見える。

「お兄。なんでドアの前にいるの！ しっかりして。お兄！」

気がつくと、俊作は里奈に抱きかかえられていた。失われる意識の途中で僕は、三途の川の向こう岸で両親が手を振っている姿が見えた。

（父さん、母さん僕、もうすぐそこまで行くよ。でも、小林さん柔らかいな。なんか不幸だけど幸せかも……）

「お兄なんかやけてるように見える」

「そ……そうね」

「というかあなた、どなたですか？」

果たして、藤堂俊作はこれから生きていけるのだろうか。

☆本話の獲得称号とスキル

「ラッキースケベ」

「男なら見逃せない」

「百人斬り」

「妹のパンツを盗む容疑」

第四話「人には譲れない想いがある」

第四話「人には譲れない想いがある」

「というかあなた、どなたですか？」

俊作の妹、恵梨は見たことがない人物が自分の家にいることに、それとその人物が馴れ馴れしく気絶している俊作を抱き抱えているのを疑問に思って思わず質問した。

「わ、私ですか。私は……藤堂君のお、お友達です。小林里奈と言います」

俊作と里奈は昨日知り合ったばかりの微妙な関係だったので、友達というのはどうかと思ったのだが、無難に友達と応えておいたほうが、いいだろうと思いとりあえず友達と答えた。

「へー。里奈さんですか。恵梨は藤堂恵梨です。お兄の妹です。しかし、へー」

恵梨はじろじろと里奈の体を舐め回すように見つめた。

「本当に友達ですか？」

「ほ……本当です……たぶん」

「そんな訳ありません！ お兄に友達なんている訳ないじゃありませんか！」

「……それはそれでひどい……」

思わぬ所を突っ込まれたので、里奈はかなり狼狽した。里奈と同じく、俊作も友達と言える友達は居ないのだ。

「いったいいくらもらっているんですか？」

恵梨の眼の色が変わって、じりじりと里奈に近寄って玄関の側にある靴箱まで追い詰めた。

「そんな……私お金なんて」

「恵梨、お兄のことならなんだって知っているんですから、通帳の残高からうふふ本の隠し場所まで……恵梨に知らないことなんてないんですから」

「……」

里奈はこの娘ちょっと怖いと思い、思わず黙ってしまった。

「分かりました。その胸で誘惑したんですね……そうじゃなかったらあなたがお兄に近づける訳がありません。お兄巨乳好きだから」

恥ずかしそうに恵梨は自分の胸を見つめていた。恵梨はお世辞にも胸があるとは言えなかった。

「あなたも大きくなれば自然と大きくなる……と思うよ」

「そんな同情いりません！」

恵梨は唐突にスカートのポケットからカッターを取り出した。

「何する気なの？」

「何もしません。ただ恵梨に約束して欲しいだけです。お兄に二度と近づかないって。恵梨は亡くなったパパとママにお兄のこと頼まれているんですから」

ゆっくりとした歩調で恵梨は里奈に近づいていく。

「私がそんな脅しに乗ると思うの？」

そう言って里奈は家の中に駈け出した。とりあえず玄関の近くにあった居間に入り込んだ。

「逃げる気！ え！」

居間にいったら家のありとあらゆるものが恵梨に向かって崩れた。その中の父親のお土産の実物大一分の一モアイ像に恵梨は下敷きになった。

「私はね。今まで私に近づく人はみんな不幸になるから嫌われてたのよ。そんな私に藤堂君と一緒にいようって言ってくれたの（※言ってません）あなたが口を挟む余地なんて少しもないのよ」

「お兄は誰にも渡さない！ ぐぬぬぬううう！」

恵梨はモアイの像の鼻を持ち上げて、モアイ像から抜け出した。抜けだした瞬間、カッターで里奈に迫った。それを里奈は近くにあった菜箸で受け止めた。

「里奈さんでしたか。中々やりますね。恵梨のカッターを受け止めるなんて」

「そういうあなたこそ」

しばらく鏝迫り合い？ が続いた。

「だけど、恵梨には勝てません」

恵梨は里奈の腹部に左膝蹴りを食らわせて、菜箸を奪い、首筋にカッターを突きつけた。

「恵梨に約束してください。二度とお兄に近づかないって」

「……そんな約束できません」

恵梨は里奈に馬乗りになって、脅したが里奈は屈しなかった。そこに居間の外から声がかかった。

「おい。何やってんだ」

気絶から立ち直った俊作だった。オデコは腫れ上がりふらふらしていたが、大丈夫のようだった。

「え。お兄」

「恵梨、お前何やってんだ。小林さんに馬乗りになってそんなうらやま……いや、事と次第によっては妹でも許さねえぞ」

「え、えとですね。里奈さんが目にゴミが入ったというので取っていたんですよ。ね。ねえ里奈さん？」

「ええ、危なくゴミだけではなく、命まで取られる所でしたよ」

慌てて恵梨は里奈から離れた。里奈は乱れた着衣を整えて、まるで何事もなかったように立ち上がった。

「命？」

「ぐぬぬ」

恵梨は里奈の言葉にぎりぎり歯ぎしりをしていた。

「まあいい。そんなことよりなんでこんなに家の中が散らばってるんだ。まるで泥棒に入られたみたいじゃないか」

居間の中はところどころものが散らばってぐしゃぐしゃだった。モアイ像もスフィンクスも狛犬も全てなぎ倒されていた。

「それは……泥棒猫が入り込んで大変だったんだから。その泥棒猫がね。ぐわーとそこらへんの物を次々になぎ倒していったの。ぐわーって」

恵梨はあまりにも慌てて、身振り手振りで説明を始めた。その様子が滑稽でとても笑えた。

「ぐわーってか」

「うん」

「くす。ぐわーって子供じゃあるまいし」

「そこ笑わない！」

「ごめん。あんまりにも可愛くてつい」

里奈はそんな恵梨をみて思わず笑っていた。しかし、こいつはなんでこんなに慌てているのだろうか。

「そういえば大変ってなんだ？」

「大変といたしますと」

「お前が大変だー。ウホウホウホって言いながら玄関のドア開けて入ってきたんだろうが。お陰で僕は頭をぶつけたんだぞ」

「ウホウホウホとは言ってません！」

「くす。ウホウホって」

「そこ笑わない！」

「そうです。大変なんです。お兄外にでてください

恵梨に手を引っ張り、俊作は家の外に出た。

「なんじゃこりゃー」

家の外に出てみると家の塀に車が突っ込んでいた。しかも赤い車が三台もだ。思わず俊作の頭の中に連鎖という単語が浮かんだ。

「恵梨が家に帰ってきたら、車がうちに突っ込んでたの。なんでお兄は気づかなかったの？」

俊作は外の様子を見て寒気を感じた。

(やはり里奈と出会って不幸が加速しているようだ。何か一步間違えれば僕は確実に死んでいた。このままではいけない。何か手をうたなければいけない。そうだ。あの娘に会いに行こう。小林さんと一緒なら何とかなるかも知れない)

「小林さんちょっと相談があるんだけど」

俊作は手招きで里奈を呼び寄せた。

「何？」

「小林さん。いや里奈ちゃん。僕と一緒に天使ちゃんに会いに行こう」

「天使ちゃん？」

「このままじゃ。二人ともただでは済まない。もしかしたら死ぬかもしれない。だから僕と一緒に天使ちゃんに会いに行こう」

俊作は思わずどさくさに紛れて里奈の手を握った。小さな温かくてすべすべとした手だった。俊作はずっと握りしめていたいと思った。

「あの女、お兄の手を握るなんて。悔しいー！」

恵梨はハンカチを噛み締めて悔しがっていた

「なんだか分かりませんが、藤堂くんがそういうのでしたら行きましょう」

「ありがとう。じゃあ明日にでも会いに行こう」

「はい……あのそろそろ手を放してくれませんか？」

「……はい」

名残惜しい手の温もりを手放した俊作は里奈と一緒に天使ちゃんに会いに行くことになった。
俊作はしばらく手を洗わないと決意したのは言うまでもない。

第五話「天使ちゃん捕獲作戦その一」

第五話「天使ちゃん捕獲作戦その一」

「あれが天使ちゃんだ」

「あれですか。ただの女の子にしか見えないですけど」

学校のベンチに一人で座って居眠りしている女の子がいる。一見すると小学生にも見える外見。茶色がかったツインテールが気持ちよさそうにゆらゆらと揺れている。

「本当に知らないのか。有名なのに」

「ええ」

仕方が無いので、里奈に天使ちゃんの説明をしてあげることにした。町では超有名な天使ちゃんはわざわざ見に来る人もいるほどだ。天使ちゃんは周りの人を幸福にすることができる。話では頭をさすると更なる幸福が約束されるらしい。ある人は宝くじが当たったり不治の病がたちどころに治ったりするらしい。その分当人は死ぬほど貧乏。代償を払い続けているようだ。ほんわかとした雰囲気自分が不幸になっているとは思っていない。それでも自分は幸せだと思っている。まさに天使ちゃん。父親がハードギャンブラーで母親は大麻を栽培していたようで国外退去処分中。今は住み込みで新聞配達と内職をしながら学校に通っている。

「そこまで知っていて今までなぜ、近づかないんですか」

「僕だって天使ちゃんの頭をもふもふしたいんだが……近づけないんだ」

俊作は今まで天使ちゃんと接触を試みていたが、必ず邪魔が入って近づけないでいた。ある時は落とし穴同好会の落とし穴。ある時は、空手部、陸上部のジョギングで行く手を阻まれる。一番の障害はガードナーと呼ばれる存在がいることだ。不埒な輩が天使ちゃんに近づかないように町をあげて保護しているのだ。まったく迷惑も甚だしい。

「たぶん、今もどこかで監視されているはずだ。さすがの僕も今まで突破できなかった」

周りを見回したがそれらしい人影は見当たらなかった。

(今日は休暇中かもしれない。そういった日もあるはずだ)

「小林さん。見ていてください。今日は突破してみせます」

「頑張ってください」

里奈の声援を受けて、行けるような気がしてきたが、その途端、腹部に違和感が生じた。

「なんか急に腹が痛くなってきた……これはとんでもない痛みだ……」

「大丈夫？ 何食べたのよ」

「昼間の学食で食ったジャムバターラーメンがあたったのかも知れない。ぐぐぐ」

新しい学食の新メニュー、ジャムバターラーメンを俊作は食べた。あのひたすら甘いラーメンは夢に出そうな程だったが、俊作は汁まで残さずに平らげた。今、その代償が来ているようだ。

「これは……まずい」

俊作は痛みで地面にうずくまった。体から異常な量の汗が吹き出している。

「情けないね。私が行くよ」

「ごめん。お願い……」

俊作の代わりに里奈が天使ちゃんに接触を試みることになった。

「必ず、私が天使ちゃんの頭をもふもふしてくるから待っていて」

「不本意だけど……お願いするよ……ぐおおお」

「では行ってきます」

俊作を置いて里奈は駆けた。里奈なら行けるかも知れないと思ったのも一瞬だった。そこに狙いすましたようなタイミングで、大量の足音が近づいてきた。

「いかん。柔道部と野球部と空手部が……ジョギングに来た……ぞ」

「ファイオ。ファイオ。勇者記念ー！ ファイオ！ ファイオ！」

あっという間に天使ちゃんと里奈の間に入り込み行く手を阻んでいる。

「邪魔だ。どけ。う……汗臭い。だめだ。これ以上は汗臭くて近づけない」

運動部特有の腐った干物のような匂いでさすがの里奈も近づけないでいた。

「負けるな……幸せになり……たく……ないのか」

「そうだ。私は……何のために藤堂君と協力しているんだ。幸せになるため……私は負けない！

どいてええええ！」

里奈は幸せのために臭さを我慢して、運動部の中に飛び込んだ。もみくちゃんにされながらも果敢に天使ちゃん目指して進んだ。

「やった……私やったよ。藤堂君」

「小林さん……よくやったよ」

里奈は汗まみれ、泥まみれになりながらも何とか運動部の鉄壁のガートを突破し、向こう岸に辿り着いた。

「後は天使ちゃんだけ……え、いない」

ただ向こう岸に行いた時には天使ちゃんの姿はなかった。

「シット！」

あまりのショックで里奈は天使ちゃんの座っていたベンチの前でうなだれた。

（なんで、臭さを耐えて頑張ったのか分からない……）

「小林さん悪いけど……正露○をもってきてください……死にそうです。ねえ。小林さーん！」

俊作はエリク○一級の万能薬正露○を持ってきてもらうまでそこから一步も動けなかった。

第六話「天使ちゃん捕獲作戦その二」

第六話「天使ちゃん捕獲作戦その二」

次の日、俊作と里奈は天使ちゃんのいる教室に直接突入することにした。俊作は一年Z組に天使ちゃんがいるという情報がある筋から掴んでいた。

「小林さん、この先は天使ちゃんの住処です。僕から離れないでくださいね」

「うん……」

俊作はこの先、何が出てくるのか分からないので異常に緊張して、一年Z組のドアを開いた。開いた先には十人程の男子生徒がドアの前に立っていた。

「む。なんだ。君たちは」

「ここから先に進みたければ、我らを倒したまえ」

そう言って彼は一様にファイティングポーズを取った。その向こう側では天使ちゃんが可愛らしく小銭を数えている姿が見える。

「望む所だ……先手必勝おおおおお！ 回し蹴りiiiiiiうりりりりりiiiiii！」

俊作は台詞を言い終わる前に相手の隙をついて先制攻撃を食らわせた。いつぞやの不良たちに比べれば赤子同然だった。二分後には俊作以外には誰も立ってはいなかった。

「藤堂君、後ろ！」

「くそ。バックアタックか」

いつの間にかに廊下中に四、五十人数の男子生徒が集まってきていた。ガタイのいい空手部のようなやつから忍者のようなものまでいた。

（まさか、こいつらみんなガードナーか）

「小林さん。いつものミサイルを頼む」

「そんなのないです」

「しからばてりiiiiiiいやああああ！」

俊作は蹴って蹴って次々と倒した。ばたばと人が一人ずつ倒れ、地獄絵図のようだった。

「たあああああ！」

「とおおおおおお！」

「ふおおおおお！」

「ぬおおおおお！」



五分後。

「ふう、ふう、さすがにしんどいです」

「藤堂くん。あなたすごいね……」

「いつのものの不幸に比べればなんでもないですよ」

俊作はあれほどの人数を一人残らず倒した。その姿を見て、里奈はかなり引いていたが、俊作は自分に酔っていて気づいていなかった。

そして、ついに教室の中へ侵入した。そこに何人かの女子生徒が地面に這いつくばって何かをしていた。

「動かないで！」

「なぜですか」

「なぜなら……私コンタクト落としたのよ。探してちょうだい。踏んだら弁償してもらおうわよ」

「仕方が無いな。探します」

「私も探します」

女子生徒のあまりの気迫に負けて、俊作と里奈はコンタクトを探すことにした。先ほど倒した男子生徒をどかしながらの作業だったので、思ったよりも手間取った。

一時間程、探した所で急にその女子生徒が顔面蒼白で立ち上がった。

「あ……」

「どうした？」

「ごめん。今日メガネだった」

「ふざけるなあああ。てりいいいやあああああ！」

「痛ああああ。何すんのよ」

俊作は怒り狂ったが、女子生徒であったのでデコピンで勘弁してやった。

「それよりも天使ちゃんはどこだ？」

「もういないわ」

「ちくしょうおお！」

俊作は腹いせに気絶している男子生徒を一人ずつ、平手打ちを食らわして回った。



次の日。

「直接挑むからだめなんだ。手紙を出そう」

「手紙なんて書けるの？」

「僕はカンケンジュン二級（※誤字ではありません）だぞ。舐めないでください」

「関係ないと思うけど」

「いいから。とにかく書くぞ」

俊作は自分の教室に戻ると、ロッカーから習字の道具を持ってきて、墨をするところから始めた。

「そこから始めるんだ……」

「当たりまえです。気持ちを込めて書かないと相手に伝わりませんから」

墨をすり終わると、一時間ほど墨に気持ちを込めるために座禅を組んだ。

「ねえ。これっていつ終わるのかな……」



「よし。書きます」

「やっとですか。はあ」

俊作は筆に墨をいっぱいつけるとダイナミックに紙に書いた。男らしい字で書いたので、手紙というよりは果たし状のようだった。

「果たし状みたいですね」

「そんなことはない。この手紙を見れば、感涙咽び泣き、私この方と友達になりたいわ。セバスチャン、連れてきなさいとなるはずだ。確認してみてください」

俊作はできあがったばかりの手紙を里奈に渡した。

『親愛なる天使ちゃん。拝啓、如何がお過ごしでしょうか。僕は元気です。ぶっちゃけ言いますと、明日の放課後、学校裏の一本桜にてお待ちしております。来なければ、あなたに不幸が訪れるでしょう。悪いことは言いません。来たほうがいいでしょう。このことを警察や親や知人に言ってはいけません。それと来るときには必ず一人で来ること。約束を破ったならばあなたの妹の命は無いと思った方がいい。お待ちしております。天使ちゃん様。僕はあなた様を心よりお慕い申し上げます。』

PS 先着一名様に小銭を差上げます。皆様お誘い合わせの上、お越しく下さい』

「どうですか？」

「まるで意味が分からないですけども、とりあえず悪意だけは感じ取れました」

「これなら来るだろう」

「私でしたら、即刻、警察に届けますよ」



天使ちゃんの下駄箱に先ほどの手紙を入れて、俊作は下駄箱の前で祈った。

「きっと来ますように」

「来るといいですね……」

里奈の冷たい視線はスルーして、俊作は明日を心待ちにして待つことにした。俊作はあまりのワクワク感でその日は寝ることができずに、パズルゲームを朝までやった。

第七話「天使ちゃん捕獲作戦その三」

第七話「天使ちゃん捕獲作戦その三」

次の日の放課後。俊作と里奈は学校裏の一本桜の前で乙女の気持ちで待っていた。今は夏なので桜は咲いてはいないが、ここは学校で告白のベストポイントとして有名な場所だ。

「来ないね」

「来ると思えますか、あれで」

と思ったら来た。天使ちゃんだ。茶色のツインテールをふわふわと揺らした小さな女の子がこちらへとやってきた。周りにはガードナーはいないようで一人のようだった。

「おい。来たぞ」

「まさか……そんな。あんな手紙で」

天使ちゃんはこちらまで来ると、俊作を見上げて立ち止まった。近くで見ると、余程小さく感じられる。本当に高校生なのだろうか。

「おてがみのひと？」

「そうだ」

「ん……」

「なんだ」

天使ちゃんは小さな手をこちらに向けて黙っている。いったい何のサインなのだろうか。

「ん……」

「どうした？」

「……こぜにほしいの。ちょうだいなの」

どうやら小銭が欲しいようだ。僕は財布から小銭を取り出して、天使ちゃんの小さな手のひらの載せてあげた。天使ちゃんは小銭を抱きしめるように抱えて頬ずりをして、大喜びをしていた。

「こぜになの。ありがとうなの」

「僕からもいいか」

「こぜにくれるひとにわるいひとはいないの。どうぞなの」

俊作は小銭のおかげで天使ちゃんのハートを掴んだようだ。何とも安い女の子だった。

「頭をもふもふさせてくれ！ この通りだ。頼む！」

「変態……発見しました」

ここに一人の変態が誕生した瞬間を目撃した里奈は、じっとりとした目で俊作を見つめて、三メートル程距離を取った。

「うるせえ！」

「いいの。どうぞなの」

俊作は天使ちゃんのツインテールをもふもふする権利を獲得した。緊張のあまり俊作はごくりとつばを飲み込んだ。

(よし……いくぞ)

「変態……ぼそ」

里奈のつぶやきを無視して、俊作は天使ちゃんのツインテールをもふもふした。天使ちゃんの髪の毛はまるで上質な絹のような手ざわりで気持ち良かった。

「ん……気持ちいいの」

髪の毛を触られている天使ちゃんは気持ちよさそうに至福の顔をしていた。まるで子猫のようだ。この瞬間俊作はあることを決心した。

「お願いだ。もっと小銭あげるから友達になってください」

「よろこんでなの」

「いよっしゃああああ。これでなでなでし放題だー！！」

俊作は今までしたことのないガッツポーズをした。

「それは何か違うような気が……」

「あたしこれからないしょくがあるの。だからかえるの」

「ああ。またあしたな」

俊作は天使ちゃんを手を振って見送った。ペンギンのようによたよたと歩く天使ちゃんはとっても可愛らしかった。

「やったぞ。小林さんあのもふもふ加減はお金を払う価値がある」

「それも何か違うと思う」

里奈は俊作の醜態を見て、腕組みをしてため息をついていた。

「これで僕は幸福だああああ」

俊作は一本桜の下を周りながら小躍りした。どんどはれ。



天使ちゃんと友達になって数日経ったが、相変わらず俊作には不幸が舞い込んでいた。(もっともふもふしなければいけなかったのかな……明日にでも天使ちゃんと会わないとな) そんなことを考えている俊作の元に妹の恵梨が何か細長い小包のようなものを持ってきた。

「お兄何か来てるよ」

「僕にか」

「うん……何だろうね」

開けてみると筒状に巻かれているポスターのようなものと小さな紙が入っていた。

「なんだろう」

小さな紙を見るとこのように書かれてあった。

『厳選の抽選の結果、ペンギンの一生カレンダーが当たりました。おめでとうございます』

「この程度かよ！ ふざけるな！」

思わずカレンダーを放り投げた。どうやら天使ちゃんのご利益はその程度のようなようだった。

「いないなら、恵梨にちょうだい」

「勝手にしてくれ」

「わーい」

俊作は質の悪い詐欺にあったような気持ちだった。今すぐにでもジャロに電話をかけたかった

。

「もう寝よう……泣けてきた」

「ねえ。お兄これどこに飾ったらいいと思う？」

「僕が知るか……ぐずぐず」

俊作は泣きながら走って、階段を駆け上がった。

「あ……あああああああ！」

俊作はたまたま階段に置いてあったバナナの皮を踏んでしまって、階段落ちしてしまった。

「お……お兄、大……丈夫、ぷぷ」

「恵梨、それ以上何も言うな」

「バナナの皮で本当に滑った人、始めた見た、あはははは、動画に撮って置けば良かった。ははははは、ははははは、あはははは、ああ。苦しい」

「もう……どうにでもしてくれ」

恵梨が腹を抱えて笑っている姿を見て、俊作は真っ白になった。できるならこのまま消えてしまいたいと俊作は心から思った。

第八話「不幸男街に出るその一」

第八話「不幸男街に出るその一」

「すごい組み合わせね」

「考えられないカップリングよ」

教室中でひそひそとうわさ話が飛び交っている。なぜなら、この教室に不幸男の藤堂俊作と不幸女の小林里奈に加えて、幸福女の天使ちゃんがいるのだ。まさかの光景に俊作達は今や注目の的だ。俊作の教室にはその珍しさから、見物人がひっきりなしだ。勝手に写真を取っていくものまでいく。

「はい。はい。立ち止まらないでください！」

「写真撮影は禁止ですのでお止めください！」

クラスメイトがあまりの混雑ぶりに整理誘導をしている。

「ごめんね。藤堂くん……私教室に居づらくて」

「別に気にしないで。僕は気にしてないから」

最初は気にしていたが、俊作はもう慣れてしまった。それよりも結局天使ちゃんのご利益は大したことがなかった。今も俊作の席で小銭を数えている。天使ちゃんは俊作と友達になった以来、よく俊作の教室に来るようになった。理由を聞いてみると、俊作と友達になってから小銭をよく拾うようになったらしい。

(まあ……なんとなく不幸も減ってきているような気がするからまあいいか)



最近はお昼も一緒に俊作と里奈と天使ちゃんとで食べるようになった。ただ、注目されるので屋上で食べることにしている。

里奈は異常に上機嫌だった。今まで友達がいなかったのでうれしいらしい。カラスが俊作の弁当をねらいに来るのでブロックしながら食べないといけないのが大変だが、俊作もみんなでわいわい食べるのは嫌いではなかった。

「ねえ。今度お出かけしませんか？」

「なんでまた」

「私ね。みんなでわいわいお出かけするのが、子供の頃からの夢なんですよ」

どうやら里奈は友達とお出かけに行くのが夢らしい。健気な夢に俊作は思わず、俊作は涙が出てしまった。

「よし。行こう！ おちゃんが連れてってやるから」

「恵梨も行く！」

突然、妹の恵梨がどこからか降ってきた。

「お前、どこから沸いて出た」

「そんなことはどうでもいいでしょ。華ちゃん。最近いないと思ったらこんな所にいたのね」

「華ちゃ……って？」

「華ちゃんですよ」

恵梨は天使ちゃんを指した。

「天使ちゃん名前あったのか！」

「当たり前だ！ この馬鹿お兄が！ それにこの女も見張らないと」

里奈を睨む恵梨。顔と顔が触れ合うくらいに里奈と恵梨はにらみ合いを始めた。バチバチと見えない火花が散った。

「望むところです」

「あたしもいくの」

「分かった。じゃあみんなで行こう」

とにかくみんなで買い物に行くことになった。

「それと藤堂君……は普通の格好してくださいね」

「普通って？」

「そのヘルメットとか防弾チョッキのことですよ」

「小林さん。僕に死ねって言うのですか」

「お兄、恵梨もそれ止めて欲しいな。目立つんだもの。恵梨やだよ。何回も職務質問されるの」

「いや……でも」

「恵梨に考えがありますから、任せてください」

恵梨の自信満々の表情だったが、俊作は不安だった。



お出かけ当日。藤堂家、俊作の部屋で恵梨と俊作が朝から今日着る服で揉めていた。

「恵梨……この装備では不安だ」

「大丈夫ですよ。恵梨も付いてますし、華ちゃんもいます」

俊作はいつもの防弾ヘルメットと防弾チョッキなしで出かけることに不安を覚えていた。俊作はまるでエベレストに普段着で望むような気持ちはこんななんだと実感していた。

「せめて防弾チョッキだけでも……」

「置いていけ！」

「はい……」

仕方が無いので、目立たない迷彩の柄の服装にすることにした。

「お兄……それも止めて」

「僕……何着てけばいいの」

「はあ……恵梨が選ぶから」

恵梨は俊作の部屋のクローゼットから無難なTシャツとジーンズを引っ張り出した。

「これ着て」

「恵梨、これは軽装過ぎないか……外に出るときは肌の露出は最小限にしないと万が一車に轢かれたらどうする」

「……」

「おい。恵梨……なぜ何も言わない」

「いいから黙って着ろ！」

「目が怖いですよ。恵梨さん……」

俊作は恵梨にメンチを切られた。恵梨は着替えを俊作に放り投げると、ドアを思い切り閉めて出ていった。俊作は黙って、恵梨が用意してくれた服に着替えた。

◇

ピンポン。

「こんにちはなの」

「おはよう。華ちゃん。あらあんたも来たの」

「来て悪いですか」

里奈と天使ちゃんがやって来た。駅で待ち合わせても良かったのだが、俊作が不幸に襲われるといけないので家に来てもらうことになったのだ。

「天使ちゃんは制服かよ」

「これしかないの」

見ると、天使ちゃんは学校の制服だった。俊作は天使ちゃんの普段着はどんななのか期待していたのだが、ちょっとがっかりだった。ちなみに恵梨はピンクのTシャツにジーンズ地の短パンにピンクのキャップ ポーイッシュな感じだ。

「小林さんは……もうちょっと他の無いのかよ」

小林さんとは言うとも黒いシャドーストライプのジャージ上下だった。

「いや、素早く動ける服装だから、ほらほら。どう？」

「どうと言われてもな」

里奈は無駄に軽快なフットワークを見せてくれた。

「高いんですよ。これ意外と」

よく見ると、某有名スポーツブランドのジャージだ。確かに高い。

(個人的には機能性より、ファッション性を重視して欲しかった……。せっかくのプロポーションをもっているのに、もったいない)

「素早くは動けるんだろうけど、なんだか……なあ」

「盛り上がりにかけますね」

「盛り上がり、なんだそれは」

里奈はきょとんとしていたが、俊作も人のことは言えないので、我慢することにした。

◇

お出かけは「さまるとりあ市」で、一番大きい都市「さまるとりあ」まで電車にて行くことになった。

「え！ 電車でいくのか。嫌だぞ、俺は。走っていくから気にしないでくれ」

俊作は最後に乗った時に原因不明のトラブルで車を止めたことがトラウマで、それ以来電車には乗っていない。

「恵梨に考えがある。華ちゃんとお兄ちょっと手を貸して」

「なんだ」

「はいなの」

恵梨は天使ちゃんと俊作の手を掴んで強引に繋がせた。

「こうすればたぶん、華ちゃんの幸福のご利益が直接もらえるんじゃないの」

どうやら恵梨は天使ちゃんのご利益で俊作の不幸も中和されるのではと、考えたようだ。

「こんなことで上手く行くかよ」

「上手くいくよ……たぶん」

「たぶんかよ」

「とにかく行くわよ」

俊作達一行はものすごい不安を残しつつも出発した。

第九話「不幸男街に出るその二」

第九話「不幸男街に出るその二」

藤堂家から最寄り駅のとんぬら駅まで歩いた。そこで二駅目がさまるとりあだ。

「ねえ。電車ってどう乗るのですか？」

「小林さん電車乗ったことないのかよ」

「私基本、この町から出たことないから」

「どんな生活してるんだよ」

俊作は里奈に切符の買い方を教えてやることにした。

「ここにお金を入れてだな……ん」

「どうしたのよ？」

「あれ……恵梨切符を買うボタンが無いぞ」

「あのね。画面の中の数字を押すのよ」

「タッチパネルなのか。僕が前に乗った時には無かったぞ」

「いつの話してるのよ。もー。ここを押してこうするのよ」

結局、俊作は妹に切符を買ってもらっていた。俊作は最後に電車に乗ったのは十年以上前だった。

「藤堂君。切符買えましたよ」

「天使ちゃんはなんでそんなに時間がかかってるんだ」

「あたし、こぜにしかもってないの」

天使ちゃんは一生懸命十円玉を入れ続けていた。

(天使ちゃんはなんで小銭しか持っていないんだ。謎だ)

切符を買って自動改札を通ろうとすると、俊作がなぜか自動改札の扉に挟まれた。

「あだ」

「お兄、なんで改札に挟まれるのよ」

「知るかよ」

俊作は駅員さんに扉を開けてもらって通ろうとするが、なぜか扉は何度もしまってしまう。

「お客さん。すいませんが脇から出ていただけますか」

「はい……すいません」

「いちえんみつけたの」

天使ちゃんは天使ちゃん小銭を拾い続けていた。



自動改札を通り抜けて、俊作達はホームまで来た。俊作は久しぶりの電車に震えていた。

「大丈夫だよな。脱線とかしないよな」

「お兄縁起でもないこと言わないでよ」

「押すなよ。押すなよ。絶対に押すなよ」

「押さないわよ！」

『一番線に快速電車が通ります』

俊作達の目の前を電車がものすごい勢いで通りすぎていった。

「おい。通り過ぎたぞ。電車」

「さっきのは快速列車よ。もう黙ってて！」

「さまるとりあ」行の電車がホームに到着し、俊作達は乗り込んだ。運良く四人が乗れる席を見つけることができ、四人は一緒に座ることになった。電車内では俊作は恐怖でふるふる震えていた。

「あの。お友達顔色悪いですよ」

「え。えと大丈夫ですよ。さっきなんか拾い食いしたみたいで大丈夫ですから気にしないでください」

俊作は知らないおばさんに心配されていた。恵梨はひどいフォローをしたが、俊作はそれどころではなかった。



十分ほど乗って、何とか「さまるとりあ駅」に到着した。俊作にとってはまた難関があった。さきほど通り抜けられなかった。自動改札だ。俊作は自動改札の前で腕を組んで考え込んだ。他の一般客は何事かとちらりと俊作をチラ見していた。

(また.....挟まれるのか.....挟まれるくらいならいっそのこと)

「とお！」

俊作はホームぎりぎりまで下がり、自動改札の前で思い切り踏み切って扉を飛びこえようとした。きれいな弧を描いて俊作は見事に自動改札を飛び越えた。

「やったぞ。恵梨。飛び越えたぞ」

「お客さん。飛び越えるのは禁止ですよ。ちょっと来なさい」

「お、おい。どこに連れていくんですか？ え、恵梨.....たすけてくれ～」

あたりまえだが、俊作は近くで見ていた駅員に連行された。

「はあ～。恵梨行ってきますね」



三十分ほどして、駅員にこっそりと絞られた俊作と恵梨が出てきた。恵梨は今日田舎から出て

きた原始人だと説明して、何とか駅員に納得してもらった。初老の駅員は三十年、駅員をやってきたが、自動改札を飛び越えた人はあんたが初めてだと笑っていた。

「ああ。疲れた。一時はどうなるかと思ったよ」

「お兄のせいで恵梨も疲れたわよ」

「恵梨さんお疲れ様です。藤堂君あまりありえないことしないで……」

「ごえんみつけたの」

恵梨と里奈は呆れていた。天使ちゃんは相変わらず小銭を拾っていた。



駅から出て、「ドリーム・シアターさまるとりあ」で映画を観ることになった。天使ちゃんたっての希望で「魔王VS勇者～仁義なき三本勝負～」 「地球かけた将棋バトル太陽vs月」 「愛しています。聖徳太子」の中で「魔王VS勇者～仁義なき三本勝負～」観ることになった。

天使ちゃんは俊作と手を繋がらないといけないので、隣に座るので恵梨は里奈とどちらが俊作の隣に座るかで揉めていた。

「あっちむいてホイで勝負よ」

「私負けませんから」

「「じゃんーけんーほい」」

「「ほい」」

「「ほい」」

「「ほい」」

「あっちむいてほい」

「「じゃんーけんーほい」」

「「ほい」」

「あっちむいてほい」

「「じゃんーけんーほい」」

「「ほい」」

「あっちむいてほい」

一向に勝負がつかない。呆れて俊作は天使ちゃんを連れて中に入った。

「天使ちゃん。馬鹿は放っておいて先に座ろう」

「はいなの」

結局、離れて俊作と天使ちゃん、恵梨と里奈の二人ずつ座ることになった。開始十分した所で、俊作は昨日テンションが上がりすぎて寝られなかったなので、気持よさそうによだれを垂らしながら熟睡していた。



「まさかあそこであんなに綱を引っ張るとは思わなかったわ」

「それよりもあんなに魔王が、食べるとは思いませんでしたよ」

「じゅうえんひろったの」

「……」

みんな一名を除いて口々に映画の感想を言っていたが、俊作は映画の殆どを寝ていたので内容は全く分からなかった。冒頭の勇者の村に魔王軍団が攻めてきて、勇者が隠し部屋に隠された所までしか見ていなかった。

「お兄はどこがよかった？」

「えーとだな」

「うん。うん」

(分からないから適当に言ってしまえ)

「魔王がもちを喉につまらせて死んだ所……かな？」

「恵梨もそこが一番よかったよ」

「あったの!？」

いったいどんな映画だったのだろうか……。

第十話「不幸男街に出るその三」

第十話「不幸男街に出るその三」

映画が見終わった俊作達は、お昼を近くのファミレス「るいざりあ」で取ることにした。「るいざりあ」はRPG風の雰囲気味わえるファミレスで、店員さんが戦士のプロテクターをつけたりしている。

「どの席になさいますか？」

俊作達は戦士のプロテクターをつけた店員さんに席の種類が書かれた写真付きのメニューを見せられた。ちなみにネームプレートには「あああああ」と書かれていた。

①ダンジョン風テーブル

石造りのテーブルと椅子、薄暗い洞窟の中のような個室。

※コメント

ダンジョンに迷い込んだような気分が味わえます。スリルを味わい方にはおすすめです。極稀にエンカウント致しますので、ご了承ください。

②酒場風テーブル

木のテーブルと木の椅子。傾いているのが特徴。

※コメント

RPGの酒場に迷い込んだような雰囲気が味わえます。酒場の喧騒BGM付きです。極稀に喧嘩に巻き込まれますのでご了承ください。

③王様の城風テーブル

長テーブル。周りは中世ヨーロッパのような作り。

※コメント

王様のような気分が味わえます。給仕はメイドか執事が選べます。

④円卓の騎士風テーブル

丸いテーブル。

※コメント

円卓に集った騎士たちのような気分が味わえます。今なら期間限定で鎧を貸出します。

⑤牢屋風テーブル

※コメント

牢屋に囚われた囚人の気分が味わえます。今ならボーダーがチャーミングな囚人服を貸出します。

俊作達はしばらく悩んで酒場風テーブルを選んだ。理由は一番まともそうだったからだ。店員さん（あああああさん）に案内されて、酒場風のテーブルに座った。

「椅子ががくがくだな」

「テーブルもよ。いつのなんだか分からないよ」

店員さんはメニューを置いて行って去っていった。メニューは所々、敗れた古ぼけた布製のメニューで文字がかすんでよく見えなかった。値段の表示はゴールド表示だった。

○メニュー

ぱるぷんてランチ 七百五十ゴールド

腐ったしたいのよだれ汁（みそ汁）三百五十ゴールド

さんちよのしちゅー 五百ゴールド

かんだだの手ごねハンバーグ 六百五十ゴールド

会心の一撃ピラフ 六百ゴールド

大王いかのイカスミスパゲッティ 六百五十ゴールド

ばくだんいわのばくだんカレー 五百五十ゴールド

……

「あたしおかねないの。だからみずでいいの」

「世話になってるからおごるよ」

「恵梨には？」

「恵梨はデイトレードで稼いでるだろ」

「ケチ」

「ありがとうなの」

それよりも俊作には気になるメニューがあった。『コックの気まぐれ味付けぱるぷんてランチ』だ。このように説明書きがある。「コックのその日の体調とその日の気温と前の日のきょじんの試合結果で決まるよ。勇気のある人チャンジだー。オプションとして胃薬が付きます」その説明書きの隣には可愛い擬人化したライオンのイラストがそえられていた。

ライオンから吹き出しが出ていて「目ん球飛び出るおいしさ??」と書かれてある。

「お兄決まった？」

「ちょっと待ってくれ」

「早くしてよね」

（非常に気になるメニューだが、あまりにもデンジャラスがなメニューだ。どうしよう……いや、しかしここは食べるしかないな）

「僕は決まったぞ。みんなは？」

「もうとっくに決まってるわよ」

「きまったの」

「決まりました」

みんな何を頼むか決まったようなので大声で店員さんと呼んだ。しばらくするとプロレスラーのようなスキンヘッドのいかつい男がやってきた。ネームプレートには「店員C」と書かれてある

。
「ご注文をお聞きします」
「ドリンクバー四つとみんなは？」
「恵梨は大王いかのイカスミスパゲッティ」
「かいしんのいちげきぴらふなの」
「私はうーん。ばくだんいわのばくだんカレー。辛さはメガン〇で」
「僕はコックの気まぐれ味付けぱるぷんてランチをお願いします」
一瞬、店員さんの表情が固まった気がした。

「コックの気まぐれ味付けぱるぷんてランチですか？」
「そうですけど」
「よろしいのですね？」
「はい」

「では、こちらの同意書にサインをお願いします。
店員さんがポケットから紙を取り出してテーブルの前に置いた。

『コックの気まぐれ味付けぱるぷんてランチ同意書』
るいざりあ殿

私こと、〇〇はコックの気まぐれ味付けぱるぷんてランチを食べるにあたり、下記の内容に同意します。

1, ランチを食べるにあたり、吐き気、頭痛、目眩等の症状があった場合、全て同意の元の自己責任として、るいざりあはその件に関して、責任を負いません。

以上

〇月〇日

〇県さま

るとりあ市さまるとりあ

店長

「あのこれって」
「同意いただけた方のみ、お出ししております」

「やばいものなんですか？」

「詳しいことはお話できません」

「ちょっとお兄絶対、やばいってやめなって」

「ちなみに食べ切れた方にはるいざりあより一万を差し上げております」

「一万円くれるんですか？」

「はい」

「藤堂君。おかしいと思いますよ」

「あの……食べ切れた方っているんですか？」

「……」

店員さんは無言、無表情だった。

(いないんだ……まあここまで来たら引くわけにはいかない)

「お願いします」

俊作は止めればいいのに同意書にサインをした。

「あ、はんこもお願いします」

「お兄やめなって……あーあ。知らないからね」

恵梨が止めたにも関わらず、俊作は構わず怪しいメニューを頼んでしまった。

第十一話 「不幸男街に出るその四」

第十一話 「不幸男街に出るその四」

待っている間にみんなでドリンクバーを使って、一番誰が変なジュースを作れるか勝負することになった。このファミレスはドリンクバーが有名で百種類ほどのドリンクがあるので、色々な配合ができる。

じゃんけんをして混ぜる人と飲む人を決めた。

「恵梨からいくね」

「僕が飲むのかよ」

初めに恵梨がジュースを作って、そのジュースを俊作が飲むことになった。五分ほどした所で恵梨が戻ってきた。

「どーぞ。名付けて底なし沼ソーダだよ」

「……」

恵梨は恐ろしいほどの濃さの緑のジュースを持ってきた。あまりの濃さに太陽の光も通さないほどだ。それとジュースのサイズが……。

「おい。しかもなんでピッチャーなんだ」

なぜか恵梨は業務用のピッチャーに汲んできた。

「お兄のいいところ見てみたい！ 一気！ 一気！」

しかも、恵梨は俊作に一気飲みを強要してきた。恵梨は「恵梨がせっかく作ったんだから飲まないわけがないよね」という目線を寄越してきたので、俊作は飲まないわけには行かなかった。

「仕方がないな。分かった。行くぞ……ごく、ごく」

恵梨のジュースを俊作が飲んでいく内に、顔が赤いではなく段々と緑にというか青くなっていく。体をふるふると震わせながらも俊作は何とか飲みきった。

「……う……うぶへええええええ」

しかし、あまりにまずさに耐え切れず、俊作はトイレに駆け込んだ。

五分後、真っ青な俊作が戻ってきた。戻ってきたなり、恵梨に吠えた。

「恵梨、殆ど青汁じゃねえか！」

「青汁濃度百二十%とおーい番茶とクリームソーダを混ぜてみました」

「くそ。今度お前の水筒に青汁混ぜてやる」



「つぎはあたしなの」

次は天使ちゃんが作ることになった。天使ちゃんはカフェオレのような色のジュースを作ってきた。それを里奈が飲んだ。

「あれ、意外とおいしいです」

「やくるとここあとみろを混ぜてみたの」

「僕もそれが飲みたかったー！」

里奈がおいしそうにジュースを飲んでいる姿を見て、俊作はテーブルを揺すりながら悔しかった。

◇

「次は僕です」

次は俊作が作るようになった。ここには古今東西、また製造中止になったジュースもある。入手経路は不明だが、懐かしジュースマニアにとっては嬉しい限りだ。

「懐かしジュース略して懐ジュー詰め合わせだ。もものてんねんすいとちからすいとはちみつれもんを混ぜて見ました」

そのジュースを恵梨が飲むことになった。恵梨はしばらくジュースを持ち上げて、光に当ててみたり、匂いを嗅いだりしていたが、やることをやってしまったら恐る恐る飲みだした。

「どうだ？ 恵梨」

「普通……」

「あっそう」

俊作は懐かしジュースにこだわりすぎて、普通のジュースを作ってしまったようだ。

◇

最後は里奈が作るようになった。

「私、実はこれやってみたかったんです。シミュレーションはばっちりですよ」

里奈は殺る気満々だった。意気揚々とドリンクバーまで行くと、すぐに真っ黒なジュースを作って持ってきた。

「名付けてブラックー」

「お待たせしました。大王いかのिकासミスパゲッティのお客様」

「はい。恵梨でーす」

店員のあああああさんが料理を運んできた。料理が来たので、混ぜジュースタイムは自然と終了となった。

「私のは誰も飲んでくれないの……」

里奈のブラックジュースは永遠に封印されることになった。ちなみに配合はコーラ＋コーヒー＋黒ごまジュースでした。

◇

他の三人の料理は来たが、俊作の料理だけがいくら待ってもなかなか来なかった。三人ともう

まそうに料理を頼張っている。

「僕のが来ない」

仕方が無いので、近くを通ったああああさんに聞いてみることにした。

「店員さん。僕のが来ないんですけど」

「すみません。今作らせますんで」

「あ……はい」

「作らせます？ どういうこと？」

「ど……どうなんだろうね」

里奈の顔はなぜか引き攣っていた。俊作は楽しみにしているので早く来て欲しいと思っていた。

（これから作るのならまだ時間がかかるだろうから、体調を万全にするためにトイレに行つてこよう）

「僕、トイレ行ってきますー」

「行ってらっしゃーい」

俊作がトイレ行つた帰りに厨房から怒鳴り声が、聞こえてきた。

「うおらああ！ このコックがああ！ はよ作れや！ 俺が怒られたじゃねえかよ！（怒）
ああ？ いいって。いいって、適当でよお。ほら手伝つてやっから。これいれろよ。これも、これも、これも……」

「……」

（何か聞いてはいけないものを聞いてしまったな）

「大変お待たせいたしました。コックの気まぐれ味付けぱるぷんてランチです」

席についてしばらく経つてから、俊作のコックの気まぐれ味付けぱるぷんてランチ来た。一見すると普通そうなランチ見える。ハンバーグにスープとライスにサラダだ。

「うわ。あれ頼む人いるんだ」

「この間……で……病院に……だつて」

「嘘？」

周りから嫌な感じのひそひそ話が聞こえる。

（仮にもお店で出しているメニューなのになにを上げさな……）

「ではいただきます」

ナイフでハンバーグを切り分け、フォークで口元に運んだ。

「お兄……おいしい？」

「……ん。意外とうまい……ん……あああああああああああああ」

「お兄??」

「藤堂君？」

「辛らあああああああああああああ！ 水、水、水、お水うううう」

「藤堂くん。ブラックジュースです」

「ありがとう。つてまずううううううううう！」

「お兄。底なし沼ソーダアルファだよ」

「ありがとう。って臭！ しかもまずううううう！」

俊作はその後、食べては水を飲みを繰り返してランチと格闘したが、結局最後まで食べることができなかった。



ファミレスから出たら、夕方近くになっていたので、俊作達は今日の所は帰ることになった。

「ありがとう。俊作君……これで私の夢が一つかなったよ」

「ん……別に、僕も楽しかったからいいよ」

「私うれしかった。また来ようね」

里奈はとてもうれしそうな顔をしていた。

(それほど、今日のお出かけが楽しかったんだな)

「またいつでも来ようと思えば来れるんだから、また来ようよ」

「その時は、恵梨も一緒に行くからね」

「あたしもいくの」

「分かった。またみんなと一緒に来ような」

(果たして、また一緒に来られる日が来るのだろうか。そうだったらどんなにかいいのに)

俊作はいつまでもこんな関係が続けばいいなと思った。



帰りの電車は丁度帰宅ラッシュにあたったようで満員電車だった。俊作は満員電車に乗るのは初めてだったので、押しつぶされそうなこんな感覚は初だった。俊作が体勢を変えようとした所で思わず何か柔らかいものに触れてしまった。

「この人痴漢です」

「え……」

近くにいるOL風の女の人に手を握られ、持ちあげられた。

「お兄……痴漢するなんて」

「藤堂君、やはりあなた……私ならいつでもいいのに」

「天使ちゃんは……どこだ」

満員電車の押し合いで手が離れていた。探しまわると天使ちゃんは遠くのほうで必死に上の雑誌を拾っていた。

「君、次の駅で降りなさい」

俊作はサラリーマン風のメガネの男に羽交い絞めにされた。

「え、ちょ……違いますよ。おい。お前ら他人のふりするな」

俊作はサラリーマンとOLと一緒に次の駅で降ろされた。仕方が無いので、他の三人も一緒に同

行することにした。結局、俊作達が帰られたのは深夜だった。



「お兄！ お兄！ お兄！ ちょっと早くドア開けて」

俊作が自分の部屋で落ち込んでいる所に、恵梨が慌ててやって来た。ドアをガンガンと叩くので、俊作はドアが破壊される前にあけてやった。

「なんだ。どうした？ 兄さん落ち込んでるんだよ」

「お兄！ 大変！」

「なんだよ。今度は」

「パパがテレビに映ってる」

「はあ？ 親父は死んだんだぞ」

「いいから来て」

恵梨に手を引かれて一階の居間まで連れていかれた。

「これ見て！」

「……親父だ」

死んだはずの親父がテレビに写っていた。親父はガンジス川で見事なバタフライを披露していた。こんなことをするのは親父しかいない。冒険途中で行方不明になった親父とおふくろは必死の捜索でも見つからなかった。見つかったのは親父のメガネとおふくろの「こけし」だけだった。俊作と恵梨はテレビの画面を見つめながら、しばらく安心して立っていた。

第十二話「宝石」

第十二話「宝石」

「……親父だ」

俊作はしばらくテレビの前で放心していた。死んだはずの親父が生きていたからだ。本当に親父かどうか決まった訳では無いが、俊作は探しに行きたかった。

「恵梨……僕は親父を探しに行きたい」

「行くってどうやって？ お金は？」

「お金はないな」

「それに今どこにいるのかも分からないだよ。どうやって探すの？」

「まあ、そうだよな」

結局、その日は親父をどうするか結論が出なかった。俊作はもよもよとした気持ちを抱えたまま就寝した。



ジリリリリ、リリリリ……ドカーン。

次の日、俊作はめざまし時計の爆発音で目が覚めた。若干、髪の毛とシーツが焦げていたので、最悪の目覚めだった。

「なんで目覚まし爆発するんだ……」

「お兄大変だよ！」

「なんだよ。朝から」

「昨日炊飯器でタイマーセットしたらね」

「玄米にでもなったのかよ」

「ううん。ご飯がパンになったのよ」

「はあー。確かにそういう炊飯器もあるけど、うちのは違うだろ」

「いいから早く来て」

居間に降りると確かに炊飯器の中はパンになっていた。昨日までは普通にご飯が炊けていたのだが、いつの間にかうちの炊飯器はパンを作る炊飯器にクラスチェンジしたのだろうか。

「まあ、パンでもいいや。朝ごはんにしよう」

「うん。そうだね」

もう十数年も不幸と付き合っているのに、これくらいのトラブルなどで動揺などしていらなかった。

ピピピピピピ。

「お兄。携帯うるさいよ」

「うん？ 僕？」

「その着信音はお兄でしょう」

「あ、あれ」

携帯の画面を開いてみたが、着信している様子は無かった。いつもの鳥取砂丘の待ち受け画面が映っていた。それなのに着信音が鳴り止まない。壊れたのかも知らないと思い、俊作は電源を切ろうとした。

「ん……電源切れないぞ」

ピピピピピピピ。

「うるさい！ お兄、早く止めて」

「そ、そんなこと言っても、電源が切れないんだよ」

段々と音も大きくなって、とても我慢できなくなって俊作は壁に携帯を叩きつけた。俊作の携帯は最後の断末魔の叫びをあげながら、次第に音が小さくなり、沈黙した。

「はあ。はあ。なんなんだ」

「きゃあああ。お兄大変！」

「今度は何ですか？」

「スープをチンしたら、凍っちゃったよ」

「嘘をつけ。そんなとんでも機能付いてるわけがないだろうが」

「ほんとだよ。いいから来てよ」

恵梨に手を引っ張られて、電子レンジの中を見てみると、確かにコンソメスープが凍っていた。さすがにまだフリーズドライ機能付き電子レンジは開発されて、いなかったはずだが、我が家では実装されていた。俊作が感心していると恵梨が突然怒り出した。

「恵梨もう嫌だ。他の家の子になる」

「おい！ 恵梨待て！」

恵梨は俊作が止めるのをさらりと交わして荷物をまとめて出ていった。なんとなく恵梨が2日に一回は家出しているような気がした。俊作はどうせ飽きたらまた戻ってくるだろうと思って、炊飯器で作ったパンにジャムを塗って、フリーズドライしたスープを齧った。

◇

今日は里奈も天使ちゃんも家に来なかったので、俊作は仕方が無いので一人で学校へに行くことになった。今日は何が起きるかびくびくしながら学校に向かったが、意外と何も無かったので拍子抜けした。

安心して、学校のちょっと前にある自販機でカムカムレモン味のジュースを買おうとした。

「あれ、財布が無い」

カバンの中も探してみたが、やはり財布は入ってなかった。どうやらどこかに落としたらしい。

「今日の昼飯代が入ってたのに……」

俊作は財布を落としたショックでかなりテンションが落ちたが、学校には行かなくてならないので先を進んだ。校門から校舎に入った先で、浮遊感があった。

「え、ええええええええええええええええええ！」

気づいたら、俊作は大きな穴にハマっていた。下にマットが敷いてあったので大事には至らなかったが精神的に痛い。

「ハハハハハハ」

「誰だ！」

「我々は落とし穴同好会だ。落とし穴を極めるために活動している。さあ。見事コンプリートして見せてくれ。ではな。ハハハハハ」

謎の落とし穴同好会の連中はそう言って、俊作を助けずにどこかに言ってしまった。いつからこの学校にはそんな奇妙な部活ができたのだろうか。

「藤堂君。何してるんですか？」

意外と深かったので一人で出れそうに無いので困っている所に、里奈が穴の上から顔を出してきた。

「何ってこの穴に住んでいるように見える？」

「見えないけど。助けなくてもいいんですね」

里奈はそう言って穴から立ち去ろうとした。

「助けてください。里奈様」

「最初からそう言ってください」

「大丈夫？」

穴の上から里奈が手を差し出してくれた。俊作は里奈の柔らかい手を握って何とか穴の外に脱出することができた。

「助かったよ。ありがとう」

「朝から大変ですね」

「まあ慣れてますよ」

◇

「生徒会長だ！」

里奈と一緒に教室に向かっていると、周りがざわついてきた。

「自分たち。おはようさん」

制服にタイガース帽の生徒会長の神崎翔（かんざきしょう）が小銭を巻きながら、歩いてきた。神崎翔は神崎グループの御曹司で、さまるとりあ市の全てを掌握している。生まれてきた瞬間

に金持ちで周りの人間からは、俊作の不幸男の対極の人間として幸福男と呼ばれていた。

「可哀想な貧乏たれ人の方々、ひらってほしいんやけど」

小銭がパラパラと地面に散らばっていた。天使ちゃんがいたら間違いなく、嬉々として拾うだろうと思ったが、天使ちゃんはいなかった。じっとその姿を見つめている俊作と生徒会長の視線が重なった。一瞬ちらりと見たが、やがて興味を無くしたようで生徒会長は俊作達の前を通り過ぎていった。

「生徒会長、なんて羨ましいんだ。僕もああいった風に生まれたかったよ」

「そうね……」

俊作は先を進もうとしたら、急に地面が無くなる印象を受けた。その瞬間俊作は地面に吸い込まれた。

「藤堂君！」

「……」

簡単に説明すると、再び俊作は落とし穴にハマっていた。俊作はこれが僕と生徒会長の差かと思ひ、泣きそうになっていた。

「一人で出れない……よね？」

「お願いします……」

俊作は再び、落とし穴から里奈に引き上げてもらって何とか学校まで向かった。



「北川さんはお休みですよ」

「北川さん？」

「天使ちゃんのことですよ。藤堂君」

「ああ。そうか」

俊作はやはり天使ちゃんがいないと不幸が連続するので、ご利益にあやかろうと天使ちゃんの教室に訪れていた。教室の中にはいないようだったので、近くのクラスメイトの女の子に聞いていた所だ。だが、どうやら休みのようだった。

「なんでお休みなの？」

「風邪のようですよ」

「僕、今日どうなるんだよ。ねえクラスメイトの女の子Aさん」

今日はいつもよりも不幸が多かったので、ちょっと焦ってしまい、俊作は天使ちゃんのクラスメイトの肩を掴んで揺さぶっていた。

「私は知りませんよ。ちょっと放してください」

「痛！」

俊作は天使ちゃんのクラスメイトにビンタを食らい、床に尻餅を付いていた。里奈に助けを求めようとしたら、里奈はいつの間にか遠く方まで歩いていた。

その後、俊作は一日中、学校中の落とし穴にハマりまくった。学校のリノリウムの床に落とし

穴を作る謎の技術に驚嘆していたのは、さておいて俊作は放課後になるころには心身ともにぼろぼろになっていた。

(天使ちゃん。早く風邪治ってくれ、僕はこのままでは死んでしまう)



放課後、雨が降っていた。朝のごたごたで俊作は、天気予報をチェックしていなかったの傘は持ってきていなかった。

「入っていく？」

「いいかな？」

「いいよ。途中までだけだね」

お陰さまで、期せずして里奈と相合い傘にて帰ることになった。俊作は密着状態に緊張していた。

「……」

「……」

里奈も緊張しているようで無言だったが、嫌な感じは全くなかった。

「グルルルルル……」

校門から出たところで、狂犬病にかかったようなヨダレを垂らした犬が鎮座していた。俊作達は嫌な予感を感じながらもうまくやりすごそうと、静かにその犬を通り過ぎた。

「よかった……」

「いつも、いつも犬に追いかけられる訳がないよな」

「グルルルルルル……ウー！！」

先ほどから唸っているので、振り返ってみると犬がこちらにものすごいスピードで駆けてきた。

「やっぱりかー！！」

俊作と里奈は犬から逃げるために傘を閉じて、走った。雨がざんざんと降り注いでいるので、俊作達はずぶ濡れになったが、気にしてはいられなかった。



「はあ、はあ、はあ、疲れた」

「な、なんとか巻けたね」

俊作達は必死に逃げて、咄嗟に軒先に入ってやり過ごした。だだ、雨の中走ったので、俊作と里奈はかなりずぶ濡れになっていた。里奈の制服が濡れて、肌にぴったりと付いてスタイルが強調されているので、俊作は目のやり場に困っていた。

「ねえ。藤堂君。ここからだと私に家が近いから来ない？」

「え？ いいの」

「そのままだと風邪引くよ。すぐ近くだから」

「じゃあ。おじゃましようかな」

「うん。私に着いてきて」

俊作はこんな機会はめったに無いだろうと思って、遠慮せずにご厄介になることにした。里奈のスケスケの制服を見つめながら、十分程歩いた。

里奈の家は古ぼけたアパートだった。やたらとうるさい音がする階段を上がって、二階まで上がった。

「ちょっと待っててね」

そう言うと里奈は慌てた様子で部屋の中へと入っていった。俊作はわくわくしながら、待っていた。しばらくするとドアが開いた。

「入っていいよ」

「おじゃまします」

部屋は1DKでそれほど広くはなかった。噂では一人で住んでいるという話なので、一人で住むには十分な広さだと思った。居室は余計なものは何もない部屋で女の子の部屋とは思えないほど質素だった。ただやたらとでかいぱっちりした目の三本足のヤタガラス君の人形があった。

「シャワー使っていいよ」

「お先にどうぞいや、ここは先にシャワー浴びろよ」

俊作はレディーファーストでは無いが、ここは男気を見せてみた。

「ふふ、分かった。お先するね。このタオル使ってね」

なぜか里奈には笑われたが、里奈が先にシャワーを使うことになった。俊作は里奈から借りたヤタガラス君の柄のバスタオルで髪の毛などを拭いた。だいたい拭き終わると、部屋に座って、暇なので周りを見回した。

そこで部屋に大事に飾ってある宝石を見つけた。それほど大きな宝石ではなかったが、不自然に半分欠けていた。俊作は妙に心引かれて手にとって見た。光に透かすとその宝石は不気味に赤く光った。

「これどこかでみたことが……」

「俊ちゃん……思い出したの？」

「え？」

いつの間にか背後にいた里奈が驚いたような目でこちらを見つめていた。